

3年間の学校生活を通して “語れる経験”を積み上げ、 大学受験や将来に活かす

▶ 千早高校 (東京・都立)

取材・文／笹原風花

ビジネス系の授業を通して 自分の将来像をイメージする

千早高校の進路指導の軸となるのが、
“語れる経験”の積み上げだ。進路指導部
主任の及川泰徳先生は、こう話す。

「学校生活すべてが進路につながるとい
う共通認識の基、高校3年間を通して
“語れる経験”を積み上げていき、それを
大学受験に、そして将来に活かすことを
大事にしてきました。私たち教員として
は、“語れる経験”ができるチャンスを生徒
にいかにか与えるかが課題であり、1年次か
ら授業や課外活動を通してさまざまな機
会を設けています」(及川先生)

1年次の進路指導のテーマは、「自分の
将来像をイメージする」。LHRと学校
設定科目の千早サービスマーケティング

(CSL)の時間をベースに、ビジネス系の
授業と連動しながら、社会活動や産業分
野について理解を深め、自分の将来と結び
つけて考えていく。

「授業で学んだことを進路選択につなげ
ていけるよう、カリキュラムを工夫していま
す。例えば、ビジネス基礎の授業では、企
業の経済活動や生産・流通・消費の流れか
ら、企業の社会的責任やSDGsへの取組
さらに金融・決済やビジネス計算なども学
びます。そのなかで、自分は将来どうい
う領域に身を置きたいか、どのような仕事
がしたいか、という問いを深めていきます。ま
た、英語の授業では、海外で活躍している
日本人の社会起業家の活動を取り上げ、
ビジネスを通して社会貢献する手段もあ
るのだということを学びます。そのうえで、
自分は将来何をやりたいかをテーマに英語

で発表しています」(及川先生)

授業や課外活動と連動し、 “語れる経験”を積み上げる

2年次には、1年次に漠然と描いた将
来像を具体化していく。肝になるのは、授
業や課外活動と連動した“語れる経験”
の積み上げだ。



左から、進路指導部主任・ビジネス科主幹教諭の
及川泰徳先生、校長の小塩明伸先生。

進路指導の課題とテーマ

都立池袋商業高校と都立牛込商業高校とを
発展的に統合し、新しいタイプの専門高校「進学
型専門高校」として2004年度に開校。科の名称
を「ビジネスコミュニケーション科」とした。開設準
備担当校長ならびに初代校長は、東京都が初め
て採用した民間出身校長の一人、佐藤芳孝氏
(ソニー株式会社出身)が務めた。佐藤氏の思い
が反映された「社会人になったときに役立つ力を
高校+大学の7年間で培う、そのベースとなる3
年間の教育を担う」というコンセプト、そしてそれ
に基づく「使える英語教育」と「役立つビジネス教
育」を柱とした特色あるカリキュラムは、現在まで
ぶれることなく受け継がれている。

ビジネスや社会についてテーマをもって実践的
に学ぶ機会が多いという千早高校の教育の特性
から、開校当初より総合型選抜・学校推薦型選抜
(旧AO・推薦入試)方式での大学進学者が多い。
そのため進路指導においては、生徒の経験値や
表現力を高めることや、多様な入試形態に対応す
ることが課題になってきた。同校では、全教員が一
丸となって3年生の進路指導にあたることで、その
課題をクリアしてきた。

○進路状況(2022年3月実績)

大学進学143人、短大進学11人
専門学校進学28人、就職5人
その他(受験準備など)16人(うち留学7人)

大学・短期大学進学者のうち、総合型選抜が40%、学
校推薦型選抜(指定校制・公募制)が51%を占める。
また、分野別にはビジネス系50%、国際系19%、語学
系10%と、高校での学びの特性を活かした進路を選択
する生徒が多い傾向にある。

○School Data

2004年開校/ビジネスコミュニケーション科/東京都教育委員会指
定「Global Education Network 20」「海外学校間交流推進校」/
生徒数619人(男子119人・女子500人)



2年生の「総合実践」の様子。生徒たちは夏休み中に最寄りの郵便局を見学し、この日は日本郵便(株)の協力のもとワークショップを行った。

推薦型での進学を想定している生徒が多く、進路指導においても1、2年次からそれをベースに話をしているので、3年次になって急に焦りだす…とならないように指導しています。小論文や面接、プレゼンテーションなどが行われるケースが多いことを早い段階から伝え、小論文模試は1年次から実施しています。また、いわゆるアカデミックライティングのスキルを磨くため、国語以外の授業のなかでもレポートなどを書く機会を意識的に設け、その積み上げが入試に生きてきます」(及川先生)

7月になり多くの生徒の志望校が決定すると、生徒1人に教員1人がつき、具体的な受験指導がスタートする。指導を担当するのは、校長ら管理職を含む全教員だ。「本校が総合型・学校推薦型に強いのは、これがあるから」と及川先生は胸を張る。「全教員で3年生を応援するというのが、本校の伝統になっています。教員1人あたり数名の生徒を受けもち、小論文指導や志望理由書の添削などにあたります。面接練習に至っては、受けもち関係なく生徒はあらゆる先生に依頼していて、放課後は至る所で練習する姿が見られます。

新任の先生も、ベテランの先生から指導のアドバイスもらったり、自身で小論文の書き方を学んだりして意欲的に取り組んでくれています。3年生への指導を通して、教員自身がスキルアップしていることを肌で感じています」(及川先生)

他校でも指導にあたってきた及川先生から見ると、千早高校の生徒の強みは、「書ける・語れる内容をもっていること」と言う。「語れる経験」を積み上げているから、志望理由書に何を書こう、面接で何を話そうとなったときに、書くこと、話すことがあるんです。コロナ禍で活動の機会が減ったなかでも、自分たちで外部のスピーチコンテストやSDGsをテーマにしたコンテストを見つけてきて取り組むなど、バイタリティのある生徒が多いですね。とはいえ、なかなか自分だけでは取り組んだ経験を引き出せない生徒もいるので、こちらからの問いかけが重要です。あのビジネスの授業ではどんなテーマで何をやった？そのときどう感じた？などと、これまでの取組に意味づけができるよう誘導しています。大学受験への取組を通して生徒の変化や成長を実感することが多く、教師としてやりがいを感じると同時に、私自身もがんばろうと刺激を受けています」(及川先生)

生徒同士が高め合う、3年間で伸びる学校に

小塩明伸校長も自ら生徒の指導にあたり、面接練習を頼まれれば快く引き受けている。

「総合型選抜や学校推薦型選抜では、自

分の考えや思いを発信する必要があり、自分自身と向き合うことが避けられませんか。なぜ？という問いかけを繰り返すなかで、私がいつも生徒に伝えているのが、オンラインワンの思いを自分の言葉で伝える、ということ。通り一遍の回答では相手の心に響きませんから」(小塩校長)

高校入学時には偏差値50を超える生徒は少ない同校だが、「3年間の伸び率は大きい」と小塩校長。実際、GMARCHの合格者も出るなど、合格実績も伸びている。一方、なかには進路選択に出遅れてしまう生徒もいる。そんなときに引っ張ってくれるのは周りの生徒だと、小塩校長は言う。

「出遅れが気になる生徒がいると、その友達に声をかけ、一緒に面接練習に連れてきてもらいます。友達が将来について真剣に考え、語っている姿を見せることが、何よりの刺激になるんです。教員から声をかけられても立ち止まってしまう生徒を巻き込んで、みんなで高め合えるようにしたい。そう考え、学校行事などでも学年間のつながりや生徒同士の関わり合いが生まれるよう意識しています。卒業生からは、『高校でいろんなことをやってみたら、チャレンジする最初の一步が踏み出しやすくなった』という声が届いており、大変嬉しく思っています」(小塩校長)

成果と課題

多様な活動の機会を提供し、生徒の進路選択の幅を広げる

「今後の課題は、生徒の進路選択の幅を広げるために、より多様な活動の機会を提供すること」と小塩校長。コロナ禍により校内外での活動は自粛を余儀なくされたが、それを取り戻すかのよう、今年度は精力的に新しい挑戦をしている。

一つは、海外との連携強化だ。東京都教育委員会より「Global Education Network 20」の指定を受け、ベトナム国際大学と姉妹校提携を締結。今後はスタディツアーやホテルでのインターシッププログラム、語学研修などを実施する。また、マレーシアやカンボジアな

どアジア圏の教育機関との提携も進めていく予定だ。

もう一つは、外部との連携だ。今年度の3年生の課題研究では、東京都教育委員会、民間企業とコラボレーションし、「在日外国人が困っていることを解決する商品開発」にチームで取り組んだ。さらに、文京学院大学との包括的高大連携も始動し、ビジネスの授業を中心に、大学生と高校生が共に学ぶ機会を設ける予定だ。

「授業で見聞きたり調べたりしたことや課外での体験が、あるときふと思い出されたり、別のこととリンクしたりしながら将来につながっていくもの。その原体験ができる高校にしていきたいと考えています」(小塩校長)